

中学校での英会話パートナープログラム実践報告

福島 知津子

(英語文化コミュニケーション学科准教授)

抄録

2024 年夏および冬に大学生が中学校の英会話授業へ参加する機会があった。参加対象となった大学生は、夏の参加には教職課程在籍の 3 年生が、冬の参加には教職課程在籍の 2 年生が中学校へ赴き、英会話クラスに参加し、中学生と英語でやりとりを行った。中学生のグループワークに大学生が参加するという二者間での英会話授業でのやりとり及び、参加した大学生によるアンケート調査の分析結果からわかったことは、参加前には英語を話すこと、また中学生と話すことの不安や緊張が多いこと、事後には経験や体験から得られたもの特に相手のことを聞くことが大事であることが印象に残っていることが判明した。

キーワード：外国語科，教職課程，英会話授業，中学生，テキストマイニング

1. はじめに

これまでの教育実習中に実習生が記載する実習日誌に書かれた共通するコメントは「大学での模擬授業は実際の授業とは全然違う」や、「大学での模擬授業のようにスムーズには中学校での授業は進まない」という内容は多くの日誌に散見されることである。また、前学期に教育実習を終えた教職課程在籍の学生が後学期に受講する授業（教職実践演習）内で毎年恒例としている問いは「大学の模擬授業への改善アドバイス」である。受講生はペアで話し合った後にブレインストーミング形式でそれらを前に板書するというものである。書かれた改善アドバイスには具体的に次のような「生徒」に関する項目が多い。

- ・生徒とコミュニケーションをとる
- ・生徒への指示を明確に出す
- ・生徒主役！
- ・（教授）レベルを下げる
- ・答えを探す生徒への対応
- ・誰も答えない

- ・（生徒役は）寝てくれると良い
- ・中学生が答えそうなことをイメージして（授業を）進める
- ・ビックリするような間違いを言ってくれると（練習として）助かる

これらの模擬授業改善アドバイスは次年度または、次々年度の教育実習へ挑む学年が受講する授業において紹介される。2 年生も 3 年生も大学での模擬授業（マイクロ・ティーチング）を控え、毎年そう例外なく教育実習経験者の生の声を真剣に受け止めている。

ただし、ここで想像と現実の乖離が生じる。7、8 年前には中学生だったはずの大学生も、もはや中学生そのものが、中でも中学生の英語力とはどのようなものであるかをイメージできている大学生は少ない。少数ではあるが、中学生のそういうイメージを持てる大学生は塾や家庭教師等のアルバイトをしているか、または家庭内で年下の家族（弟や妹）に英語を教える経験をしている場合であろう。ただしその場合、その一人だけ、そのグループの英語力や中学生

のイメージであり、特定のであると言える。おそらく担当することになる教室内の 30 数名、またその複数クラスの英語力を手当てするというイメージはできていない。その理由は、学生による模擬授業の成果にある。模擬授業後にはクラスメイトからはピア・フィードバックを、授業担当者からもフィードバックを提供され、それらに基づいて振り返り（リフレクション）を行う段階へ進む。振り返りに散見されるのは、「50 分間の授業に詰め込みすぎた」、「わかるかなあ、と思ってやってみたけど、みんなのフィードバックに難しすぎると書かれた」など「中学生が何であるか・どうであるか」、つまり生徒のことを理解できていない現実である。それが今回、大学生が中学生の英会話授業へ参加できる機会を幸運にも得ることができた。その英会話授業に参加した大学生が参加前にはどう感じていたか、また参加後の印象やコメントをアンケートを通じて調査分析を行った。

2. 先行研究

2.1 ALACT モデル

Korthagen が 1985 年以降提唱している ALACT モデルは 5 つのプロセスから成立している。図 1 にはそのモデルである。

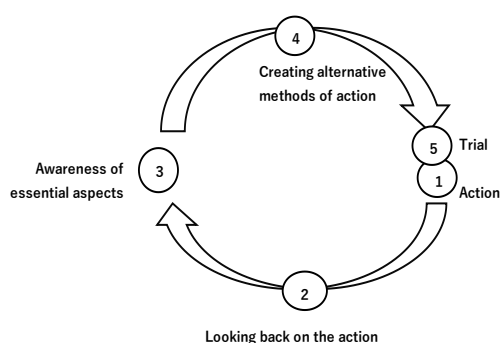


図 1 ALACT モデル(Korthagen, 2011)

①Action: 行為、②Looking back on the action: 行為の振り返り、③Awareness of essential aspects: 諸相への気づき、④Creating alternative methods of action: 行為の選択肢の拡大、⑤Trial: 試行

これら 5 つのフェーズは 1 つ 1 つの名前の頭文字をとって *ALACT model* (アラクトモデル) と呼ばれる。Korthagen(2011)によると、5 つのフェーズは止まることのないプロセスなので、平面ではなく立体的で①と⑤は平面ではなく、この螺旋は（上向き）スパイラルモデルである。

“The fifth phase is again the first phase of the next cycle, which means that we are dealing with a spiral model: the realistic approach aims at an on ongoing process of professional development.” (Korthagen, 2011; 39)

①で模擬授業をした後に放置するのではなく、②で振り返りをさせる。そうすることで次の③自分の行為にとって必要不可欠な気づきがあるという。本研究に当てはめれば、それは「中学生が何であるか・どうであるか」に気づくことができるかということである。

外国語教育の場合、もう 1 点生徒理解で外せない理論がある。それは $i+1$ である。S. Krashen の理解可能なインプット (comprehensible input) のことである。「Krashen は、現在の言語能力レベル（これを i とする）より少し上で、なおかつ理解可能なインプット ($i+1$) が言語習得を促進するのに不可欠であると主張する。」（白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則，2019 年）英語科教師にとって学習者の i を探ることは重要な任務とも言える。中学生を理解することは、中学生そのものを理解することと、その中学生の英語力を理解することの 2 つは不可分であり、表裏一体と言える。

3. 実践内容

3.1 目的

中学生の英会話授業に大学生が参加し、英語での質問やプレゼンテーションに対し、英語でやりとりすることで、普段一緒に勉強しているクラスメイトとは違う相手に英語で話す機会を中学生および大学生双方に提供することを目的とする。

3.2 訪問時期と参加者

夏：2024年7月12日（金）と13日（土）

冬：2024年12月13日（金）と14日（土）

英会話パートナープログラムと命名され上記の日程で行われた。科目としては、中学校の「英会話」という授業に大学生が前学期と後学期に訪問し、英語で中学生とやりとりをするという試験的プログラムである。

訪問した中学校では、日常的に英語母語話者の教員が常駐しており、今回の「英会話」授業は、日本人英語科教員とのティームティーチング（以後 TT）で授業が運営されている。また、今回訪問したクラスは特に英語に注力しているクラスであり、英語が大変苦手という生徒は多くは無いと推察する。

大学生：夏 16 名 / 冬 14 名

中学生：3 クラス（30 名×3=90 名）

教員：英語母語話者教員 1 名、日本人英語科教員 1 名、大学教員 1 名

3.3 プログラム内容

授業は 50 分間で大学生は教室へ入室すると、まず一人ずつ英語で挨拶をする。中学校の授業担当者より大学生と中学生はそのやりとりのほとんどを英語で行われるようにと事前に指示されている。中学生はグループに分かれており、1 グループ 4～6 名で構成されすでに配置されている。そこへ挨拶を終えた大学生が、各グループに 1～2 名で配置されることとなる。

次の表 1 には、夏と冬のそれぞれの授業内容が示されている。大学生は各グループに配置されると手順 1～3 を行うこととなる。中学校の授業担当者は様子を見ながらおよそどのグループも手順 3 までを終えたところに、指示を出し、大学生は別グループへ移動することとなる。

表 1 英会話授業の流れ

手順	2024年 夏		2024年 冬	
	大学生	中学生	大学生	中学生
0	挨拶		挨拶	
1	自己紹介		自己紹介	
2	質問に答える	事前準備した質問を尋ねる	チャットタイム	
3	アンケートに回答する	アンケートの質問をする	プレゼンテーションへのフィードバックをする	プレゼンテーションをする

それを 3 ラウンド行った。つまり大学生は 3 回、違うグループとやりとりをする機会があった。各グループの事前に用意している質問やプレゼンテーションの内容は異なっている。

4. 事後アンケート

4.1 参加者

本プログラムに参加した大学生の合計 20 名（夏 9 名、冬 11 名）から回答を得た。参加した中で感じたこと等を参加当日からその後 1 週間の期間でウェブ上にて回答するアンケートを実施した。

4.2 方法と質問肢

アンケート調査は Microsoft Office 365 の機能に含まれる Forms にて作成され、各質問肢は以下に記載する。Q3、Q4、Q6 は自由記述回答形式とし、それ以外の質問肢には回答に選択肢を設定した。Q1 および Q2 は冬の参加者にのみ尋ねた問いである。

Q1 英会話パートナーPG は授業の一環でしたが、それについてどう思いますか。（冬）

Q2 英語科教育法 2 の授業内容としてはどう思いますか。（冬）

Q3 この PG に参加する前の心境はどうでしたか。自由に書いて下さい。（自由記述—共通）

Q4 この PG に参加した後の心境はどうでしたか。自由に書いて下さい。（自由記述—共通）

Q5 改善したほうがよいと思うことを選んで下さい。最大 3 つまで選べます。（共通）

Q6 次回の英会話パートナーPG に参加する人たちにに向けて、ぜひアドバイスを書いて下さい。（自由記述—共通）

次に自由記述回答はエクセルに入力し、それを KH Coder 3（牛澤，2021；樋口，2014）を使い、テキストマイニングの手法で抽出語を分析し、集約された回答を量および質の両面から検討する。

4.3 分析結果

まず選択肢を与えている問い Q1、Q2、Q5 の

記述統計を以下表2に示す。

表2 Q1, 2, 5 分析結果

Q1. 本PGは授業の一環でしたが、どう思いますか。(複数可)		
	n	%
ボランティアで良い	7	41.2
クラブ活動で良い	3	17.6
英語科教育法の授業で良い	7	41.2
	17	100
Q2. 英語科教育法2の授業内容としてはどう思いますか。		
	n	%
あまり合っていない	1	9.1
まあ合っている	3	27.3
とても合っている	7	63.6
	11	100
Q5. 改善したほうがよいと思うことを選んで下さい。(複数可)		
	n	%
日程調整期間が短かった	3	18.8
実施時期が学期末で忙しかった	3	18.8
学年が上の方が良い	2	12.5
学年が下の方が良い	0	0
グループの大きさを2～3名が良い	7	43.8
グループの大きさを7～10名が良い	0	0
50分間での内容が多い	1	6.3
50分間での内容が少ない	0	0
	16	100

繰り返すが、Q1とQ2は冬の参加者にのみ提示された問いである。Q1（英会話パートナーPGは授業の一環でしたが、それについてどう思いますか。）について、夏の参加者はボランティアで希望者を募ったが、冬の参加者は英語科教育法2の授業の一環として参加したので、それに対する意見を尋ねた。その結果は、「ボランティアで参加」という意見と「授業の一環で参加」が同率となった。

Q2（英語科教育法2の授業内容としてはどう思いますか。）へは90%を超えて「英語科教育法2の授業内容に合っている」という回答を得た。「英語科教育法2」は中学校教諭の免許取得のための必修科目と指定されている。授業でも中学校での外国語科（英語科）を想定した内容を提供しているため、本プログラムで中学校2年生との英会話という内容は、授業内容の一環として齟齬はさほどない。

Q5（改善したほうがよいと思うことを選んで下さい。）については、1グループが4～6名であることで実際に活動をした大学生にとっては、

グループサイズが大きく感じたようだ。筆者が授業観察している限りでは、4～6名のグループであったとしても、中学生には一人一人に必ず発言する機会が与えられており、質問等を個人が用意している姿を見ることができた。

次にQ3とQ4についてそれぞれの自由記述をKH Coder 3にてテキストマイニングし、抽出語の関係性を視覚化した図（共起ネットワーク）が、次の図2と図3である。

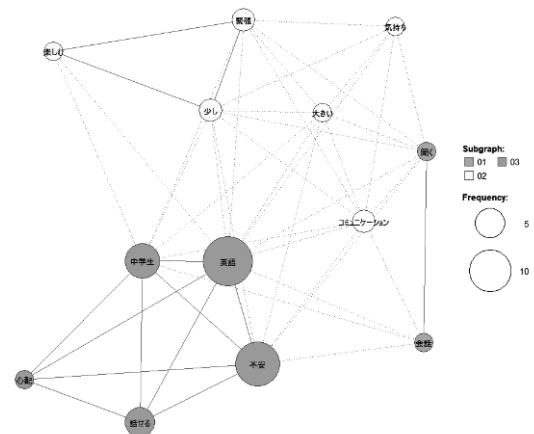


図2 事前心境の抽出語の共起ネットワーク

図2は(Q3. このPGに参加する前の心境はどうでしたか。自由に書いて下さい。)を視覚的に表したものである。特徴的なのは、クラスターが3つしかないことである。

「不安」、「心配」、「中学生」、「英語」、「話せる」については、英語を話せるかが不安、と中学生と話せるかが不安その両方が関係していることがわかる。

「緊張」、「少し」、「楽しむ」からは、緊張はあれども、少し楽しむことを意識できているようだ。抽出語自体が少ないことがわかる。

次に図3は(Q4. このPGに参加した後の心境はどうでしたか。自由に書いて下さい。)を視覚的に表したものである。クラスターは5つに増えており、抽出語の数も多い。

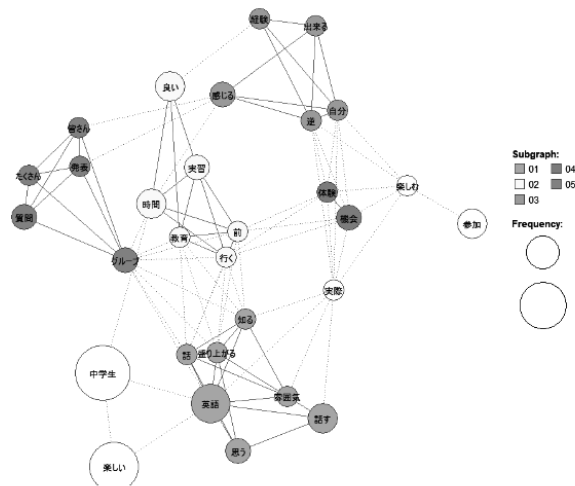


図3 事後心境の抽出語の共起ネットワーク

特徴的なのは、図2にあった否定的な語が消えていること。「英語」、「話す」、「思う」、「雰囲気」、「盛り上がる」、「知る」にあるように、英語を話すことを試みて良い結果を得られた語が関連している。「経験」、「出来る」、「感じる」、「自分」、「逆」からも、中学生の授業へ参加してみて、経験から感じる事ができることがあったということと、そのことが次の「教育」、「実習」に「行く」、「前」の「時間」との関連が多い。「機会」、「体験」、が「実際」との関連が多かったことから、何より実際に体験する機会となったと考えられる。

図2と図3を比較すれば、その事前と事後の心象の差は明らかである。抽出語の種類が増加し、その語も「不安」「緊張」のような自分のことが多かったが、事後には「中学生」の頻度が増加し、「楽しい」との関連が強くなっている。自分の気持ちだけしか見えていなかった心象から、中学生を体験的に感じ取ったことがわかる。

次に図4は、次年度の参加者へのアドバイスに書かれた抽出語の中でも、特にどの語が印象的な語であるかをKH Coder 3が示したものである。原点(0,0)から離れれば離れるほど、印象的な語を表していることから、グラフの上部に筆者が囲った点線、「使う」と「意識」が、書かれたアドバイスの中でもポイントになるということである。グラフの下部に筆者が囲った実線、「準備」、「大丈夫」が次なるポイントになる。

準備ということは、本プログラムにおける「事前指導」がポイントになると理解できるので、これは参加者からの鋭くも彼女たちが身をもって体験した助言ととらえることができる。

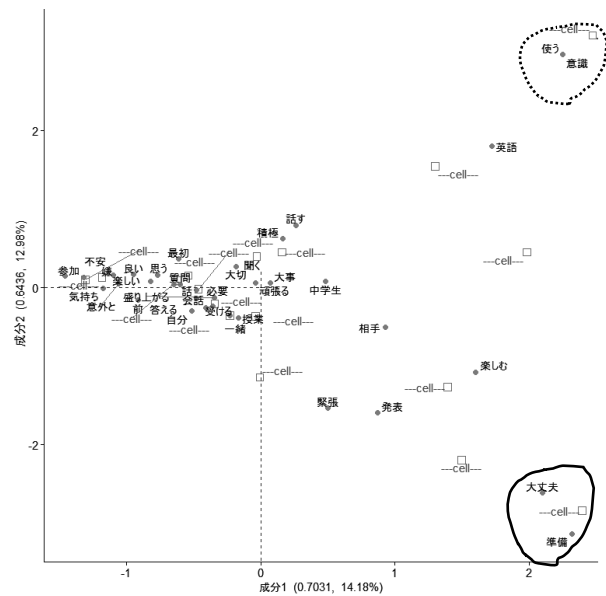


図4 アドバイス抽出語の対応分析表

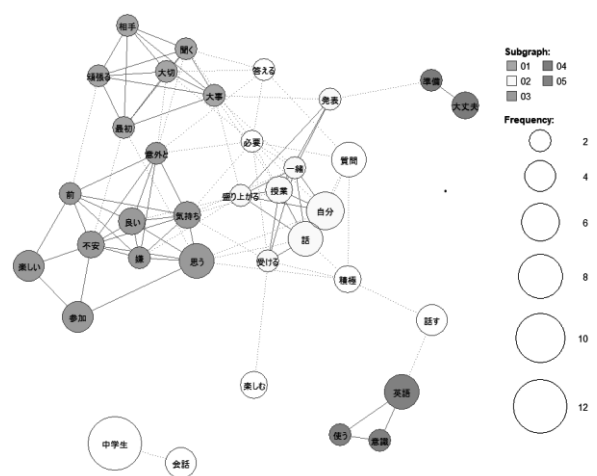


図5 アドバイス抽出語の共起ネットワーク

上の図5は次回参加者へのアドバイスに書かれた抽出語それぞれの関係性を示した図である。次回参加者へのアドバイスは具体的な自身の経験を述べる事が多く参加者が学んだことを見つけることができる。クラスター数も5と事後の心象と同数で、さらに事後の心象と形も似て

いる。「大切」、「大事」、「聞く」、「相手」、「最初」、「頑張る」には聞くことの大切さが表れている。事前の心象では、「話せる」かどうか不安で心配だったはずだが、最初に「相手」の話（英語）を「聞く」ことが大切で大事なことだと気づいたようである。事前には参加者の視点が「自分」だけだったものが、事後には「相手」を「聞く」ことへ移行している。この変化を視覚的に捉えたことは大きな発見である。自由記述だけを見ていてはつい見逃してしまう点だが、抽出語同士の関係性を視覚化したことでこの大きな成長のあかしを見つけることができた。

5. おわりに

5.1 考察

いずれにしても参加した大学生が得るものは大きかった。中学生そのものを、そして何より中学生の英語力にふれることができたことは有意義である。そのイメージを持って、今後の大学での各授業を、特に教職科目や模擬授業への準備に生かされることを期待する。中でも、英語科教員が意識すべき $i+1$ の i は、机上での勉強だけでは掴めないことも理解してもらえる機会となった。

大学教員として得られたことも述べたい。本プログラムを通して教職課程の学生、特に2、3年生がただ教育実習を「怖い、不安」だけのものではなく、「なぜ教育の現場に飛び込まなくてはならないのか」という問いへ大学生の理解を促す土台にできることに気づくことができた。中学校免許取得のための現在のカリキュラムでは、当然中学生および高校生を想像して進められる授業が大半である。しかし7や8年前とはいえ、もはや大学生に中学生をリアルにイメージすることがかなり困難な作業である。そして残念なことに、それを補填する機会は大学のカリキュラムにはない。もしあるとすれば、それは個人的に参加しているスクール・ボランティアや私塾を含める教育関連施設でのアルバイト等への参加である。模擬授業（マイクロ・ティーチング）でのパフォーマンス評価、そのために作成する学習指導案の評価等に大きくかわ

ることが生徒理解である。宮崎(2023: 34)が述べるように「指導技術は、生徒理解の上に成り立っています。目の前の児童生徒がどのように反応するか、どのような気持ちになるかを想像できてこそ、技術は効果を発揮します。(後略)」大学で何時間を費やしてもこの生徒理解をさせる時間がなければ、大学における模擬授業や指導案作成の指導も、実習前のテクニックやティップスの伝授に留まってしまう。これがどうしても先述した ALACT モデル(図1)の③ Awareness of Essential Aspects (本質的な諸相への気づき) から④ Creating Alternative Methods of Action (行為の選択肢への拡大) へ移行する際に筆者が大きな穴が開いているように感じていたことではないか。つまり、「中学生」というものが、もはやわからない」ことに③気づいたとして、④へ移行するためには、「中学生」を(ある程度)知らないままでは、どう拡大(create)したらよいかわからないままトンネルの中にいるようなものではないか。

それが今回アンケートの Q6. (次回参加者へのアドバイス)の分析で見つけることができた。「自分」視点から「相手」視点への移行は今回参加者が気づくことができていたことがわかった。「最初」、「相手」、「聞く」、「大事」は、④ Creating alternative methods of Action へ繋がる大きなステップである。今回は試験的な試みではあったが、中学生と英会話パートナーを体験することで、ALACT モデルを知らない大学生も自然とその順番に沿って授業や生徒を見る、理解する力をつけていくことがわかった。

最後に、今回の参加者の多くから出た「楽しかった」という感想は、将来教職に就くことを志望している学生の正直な気持ちであれば、これ以上頼もしいことばはない。

5.2 今後の課題

まず今回の実践は初めての試みであったためアンケート結果に書かれた参加者の日程調整期間、それに関連して本プログラムの(大学生への)事前指導に影響があった。次年度以降に同じプログラムの機会が与えられれば、事前指導

中学校での英会話パートナープログラム実践報告

内容はより具体的な内容を提供することが可能である。それ以外に次の2点が今後の課題と言える。

- (1) 中学生からの本プログラムへの印象を聞くことができていない。
- (2) 本プログラムは無償ボランティアの位置づけであったので、参加者を集めることが困難であった。

(1)については、今後中学校とより具体的な研究計画を立て、中学生からの印象も加えて分析することで大学生と中学生それぞれの印象や感想を比較することが可能となる。中でも大学生にしてほしいことなどが明らかになれば、それを大学生用の事前指導に組み入れることができ、より内容深い交流とすることができる。

参加者の自由記述をテキストマイニング分析した結果、プログラム前はとにかく不安要因のみが出現している。不安に加え、ボランティアで募るとなれば、(2)のように参加者数が伸び悩んだのもそれらが原因だったように推測される。アンケート結果からも教科教育関連科目の内容に沿っている印象が大学生にもあったようなので、授業等へ組み入れるなど工夫を段階的に導入してみることが現実的である。大学生にも本プロジェクト参加のメリットやどんな成長が期待できるか見えやすいシステム構築へと繋げられれば、中学校と大学との連携事業としても継続性(sustainability)が期待できる。

引用文献

樋口耕一(2020年).『社会調査のための計量テキスト分析－内容分析の継承と発展を目指して－第2版』ナカニシ出版.

Korthagen, F. A. J. (2011). Making teacher education relevant for practice: The pedagogy of realistic teacher education. *Orbis Scholae*, 5(2), 31-50.

宮崎貴弘(2023年).「指導技術は生徒の心理を踏まえて」『英語教育』, 72(3), 34-36.

白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則(2019年).『英語教育用語辞典 第3版』大修館書店.

牛澤賢二(2021年).『やってみようテキストマイニング－自由回答アンケートの分析に挑戦！増訂版－』朝倉書店.

謝辞

本プログラムには中学校英語科上村久美教諭、英語科教員 Jeremy Barlow 先生、葛西コース主任そして中学2年生のみなさんと教職課程在籍の大学生にご協力いただきました。皆様に心より感謝申し上げます。